

特集 はつ農女のじよ！

今、注目を集める旬の農業女子たち

農業は男性の職業。女性はそのサポート。
男性中心の社会が続いていた農業の現場に、
農業女子なる女性たちが参戦し、
全国で注目を集めています。

廿日市市内でも、
農業を職業として選択した女性たちが、
日々それぞれの視点で農業と向き合っています。

女性ならではの視点から考える農業。
女性だからできる新しい農業。
生み出すアイデアや工夫で、
消費者のニーズに応えます。

今回は市内で農業を営んでいるはつかいち農業女子、
通称「はつ農女のじよ！」の皆さんに
農業の魅力や楽しみ、就農への覚悟など
さまざまな思いを聞きました。

―特集7ページまで―



農事組合法人さいぎで男性農業者に混ざり農業を勉強している青木ゆかりさん（33歳）。ベテラン農業者の指導を受けながら、コンバインを操縦し、稲刈りに挑戦。

市内で農業に携わる女性たちが気軽に話せる環境を

もともと農業は家族経営が主で、家族全員が作業し、男女ともに関わる職業でしたが、経営主＝男性の農家が多く、女性が前面に出ることはあまりありませんでした。

しかし、最近では、あらゆる面で女性の力が注目を浴び始め、これまで長い間男性社会のイメージが強かった農業の世界でも、女性の力に注目が集まっています。本市でも、女性新規就農者や夫婦で農業経営をしている人、農家に嫁いだ人など、多くの女性農業者が頑張っています。

そのような中、農林水産省では農業に従事する女性を応援する「農業女子プロジェクト」が進められ、女性農業者と民間企業がコラボし、さまざまな商品開発を行ったり、全国の農業女子同士の情報交換や、情報発信などの活動が行われたりしています。市でも、前川農園の前川鈴美さんと池田淳子さんが県内で初めてプロジェクトメンバーに加入し、多数の商品開発に関わり、県外の農業女子との情報交換も行ってきました。しかし、県内にはプロジェクトメンバーが少なく、さらに本市では前川農園の2人以外にメンバーがいないため、女性同士で、身近に悩みを話し合える相手が欲しいと思っていたようです。本市には、若手農業者の集まりである農業者クラブなどがありますが、メンバーはほとんどが男性。女性の情報交換の場が無く、私ももっと女性たちが気軽に話せる環境があればいいなと感じていました。

そこでできたのが、はつかいち農業女子会です。皆さん家事に携わりながら農業を営んでいて、なかなか会う時間が取れないので、普段はSNSのグループ機能を活用し、情報交換をしています。今では、農業者だけでなく、農協や共済組合など、農業に携わるさまざまな分野の女性メンバーが参加し、情報交換の幅も広がっています。

今後もそんなつながりが広がり、はつ農女の皆さんが生き生きと農業に取り組むことができたらと思います。



Interview

廿日市市 農林水産課
にのみや おさむ
二宮 理 係長